

古田史学の会・東海

# 東海の古代

第149号 平成25(2013)年1月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta\_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku\_tokai

## 2013年 明けましておめでとうございます

会長 竹内 強

新年明けましておめでとうございます。

去年は、公私いろいろなことがあり、大変な年でした。

本会にとっての大きな出来事は、昨年7月に開催した「第24回愛知サマーセミナー2012」に古田武彦先生をお迎えして講演をしていただいたことです。真夏の暑い中、十分な対応もできず、期待していた高校生の参加も思うようにはいきませんでした。会員の皆さんを始め多くの方々に直接古田先生のお話を聞いてもらうことができたことは、今後の東海地域の古田史学の発展にとって大きな一歩になったのではないかと考えています。

個人的な出来事としては、昨年3月に長女が娘を出産し、私にとっての初孫ができたことです。また、6月には、私自身が胆石を患い入院、結局胆嚢炎になり胆嚢摘出手術を受けることとなりました。そして、10月からは、自宅の建て替えと、あわただしい1年でした。

ところで、去年の12月1日から今年の1月14日まで、名古屋市博物館で「大須観音展」が開かれています。名古屋市民にとって大須観音は、戦前、その街自体が名古屋の最大の繁華街でした。戦後、一時期寂れてしまいましたが、最近はまだ若者の集まる賑やかな街に生まれ変わりました。とは言っても古代史好きの私たちにとっては、大須観音と言うよりも真福寺と言った方が興味深いと思います。今回の「大須観音展」ではその「真福寺宝生院」に所蔵された貴重な文献や絵画などが公開されています。中でも国宝『古事記』は、現存するもっとも古い写本とされています。私は古田先生が最近論証された「矛と弟」の字の違いなど是非一度見てみたいと思い、12月の末日に出かけました。残念ながら『古事記』は、序文のページが開いた状態でガラスケースの中に展示されていたので、「矛」字は確認できずに帰ってきました。

数日後、会員の田村さんから電話で「大須観音展に展示されている重文『七大寺年表』の解説文に、白鳳11年の年号が記載されていた。学芸員に尋ねてみたが、明瞭な回答を得られなかった。」と言われました。私は『古事記』ばかりに気をとられて、そこまで見ていなかったもので、1月はじめに再度博物館を訪ねました。確かに『七大寺年表』の解説文に「白鳳11年(682)から延暦21年(802)までの間の僧綱補任を中心として、仏教関係の記事を編年体で記したもの。」となっ

ています。学芸員に「この文献自体に白鳳という年号が明記されているのか？」と尋ねました。すると「実は、この文献は同11年から始まっている。その前が破損していて不明です。」というのです。ただ、その続きの持統元年は段落の位置が違っており、さらに、その後の天平元年とは段落の位置が一致するので、天皇名でなく年号ではないかと判断し、「天武11年」ではなく「白鳳11年」としたのではないかとのことでした。

私の理解では、『二中歴』の白鳳は661年から始まるので、682年は白鳳22年であると考えていました。そこで昨年発刊された『九州年号の研究』を読み直してよく解りました（『九州年号の研究』P83～92）。天武元年を白鳳元年に盗用したのではないかと。天武あるいは持統により「九州年号」の盗用が行われたのではないかとという古賀さんの推論は大変おもしろく読みました。古田史学でなければ理解できないことが、古代史には存在するという出来事でした。

さて、昨年12月、ミネルヴァ書房から、古田武彦古代史コレクション14・15の『多元的古代の成立<上>・<下>』が発刊されました。今年は『九州王朝の歴史学』、『失われた日本』と続き、このシリーズは既刊と合わせて27冊発刊となる予定です。古田先生の著作が新たな装いで、書店そして図書館で多くの人達の手にとられることと思います。

新しい年を迎え、古田史学が多くの皆さんに広まり、ますます素晴らしく輝きを放つことを願い、新年のごあいさつといたします。

## 「舩牟羅國」は「南海の国」か

名古屋市 石田敬一

### 1 「五尺の珊瑚樹」に関する古田説

古田武彦氏は、『古代の霧の中から』（1985年11月、徳間書店）の第三章の“「五尺の珊瑚樹」問題”の項において、珊瑚樹を根拠として舩牟羅國を南海の国であると論述されています。

その主旨は、好太王碑の第三面第一行に記述されている珊瑚樹について、これを海に生息するサンゴであるとした上で、百済から高句麗への献上物に南海の産物サンゴがある理由は、百済の属国に舩牟羅國があり、その国は南海の国であるので、不思議ではないというものです。

私は、舩牟羅國を南海の国とする古田氏の考えとは異なる見解を持っています。

次に『古代の霧の中から』より、「五尺の珊瑚樹」に関係している部分を抜き出します。

### 第三章 画期に立つ好太王碑

#### 2 新しい諸問題

##### その二 「五尺の珊瑚樹」問題

第一行に、どんなことが書かれているかと申しますと、「官兵移師百殘口其城百殘王懼復遣使献五尺珊瑚樹二朱紅寶石筆牀一他倍前質其子勾拏太王率」\*1 が、入っているわけです。ここで、わたしが注目したのは、「五尺珊瑚樹」を献上した、ということです。サンゴ樹という、樹木もあるそうですが、普通に考えると、南海の珊瑚と考えるのが、普通の理解ではないかと思うのです。

そうしますと、珊瑚樹というと南海のものであるのに、百済王がそれを献上するというのは、非常に不思議なことですよね。誰かが、“偽りに思いついて、書く”というようなものではないですね。それなら、もっと似つかわしいものを書きますよね。それで、どうしても“無視できないもの”を、感じていたんです。

その後、調べていきますうちに、これと相対応する問題ができました。それは、『隋書』百済伝ですね。「其の南、海行三月、舩牟羅國有<sup>たんむら</sup>。南北千余里、東西数百里、豊鹿多し。百済に附庸す」という言葉がある。この舩牟羅國を舩羅國<sup>たんら</sup>、つまり濟州島と注釈しているものがある。諸橋の『大漢和辞典』なんかも、その立場に立っている。

\*1 現在は剥離して確認できないが、剥離する前の碑文を、王志修『高句麗永樂太王碑歌攷』に記述されている。

しかし、舩牟羅国を舩羅国は、似ているけれど違うわけです。三字のうち、二字同じなら、両者は＝(イコール)などというのは悪い癖でして、何よりも、二つの国の位置と大きさが違う。つまり、百済の都からでしょうが、舩牟羅国へは、南へ船で三ヵ月かかるところにあると書いてある。済州島まで、三ヶ月もかかりませんわね。

しかも、島の形が(舩牟羅国が、島であるとすれば)「南北千余里、東西数百里」、縦長の形である。短里か、長里かの問題はあるんですが。しかし済州島は、横長ですからね。この点からもちがう。「麀鹿多し。百済に附庸す」。つまり、百済の属国であると書いてある。

『隋書』に、もう一つ記事がありまして、北朝側の隋が、南朝側の陳を平定したときに、海戦を行ったとき、隋の軍船が漂流して、南のかた舩牟羅国に至った。その舩牟羅国は、自分の関係筋である百済へとその軍船を送り返した。そして百済から、さらに送られて、隋へと無事に帰れた、という漂流譚が、書かれているわけです。わりと簡単ですけど、そういう形で描かれている。ですから、中国人が、実際に行ってみた国なんですね。「海行三月」というのも、その経験にたっているんでしょう。だから、これは単なる噂話を書いたものではない。他から聞いて、単なる奇譚として無責任に書いたものではない。ですから無視できないものがあります。

ですから舩牟羅国＝(イコール)舩羅国というのは、やはり間違いで、舩牟羅国は南海の国である。そうすると、百済からの献上物に珊瑚樹があっても、不思議ではないこととなります。

(『古代の霧の中から』166・167頁)

古田氏のこの主張の中に問題点が6点あります。

## 2 珊瑚樹について

第1点は、珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>についてです。

珊瑚樹を、海の産物であるサンゴとするのは間違いです。海の産物であるサンゴ<sup>サンゴジュ</sup>は、珊瑚樹とはいいません。「樹」は付けずに「珊瑚」です。

好太王碑には、「珊瑚樹」と刻まれています。これは明らかに樹木である珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>のことを指しています。ですから珊瑚樹を珊瑚と解釈することはできません。

珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>は、秋にきれいな赤い実を付ける木で、海の宝石の珊瑚のように美しいことから、珊瑚の樹ということで、珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>の名がついたとされます。珊瑚は福を招き魔を払う七福神を宿していると古くから信じられており、愛媛県では、珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>をフクマネキ(福招き)と別名で呼ぶように珊瑚樹には珊瑚と同様の信仰があったと思われる。また、珊瑚樹の分布について、『新訂牧野新日本植物図鑑』\*1では、

関東南部から西、南日本および台湾、朝鮮半島南部 (『新訂牧野新日本植物図鑑』710頁)

とあります。朝鮮半島南部には分布するものの、朝鮮半島北部には分布しません。このため、珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>が分布する朝鮮半島南部の百済から、珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>が分布しない朝鮮半島北部の高句麗に献上する意味がよくわかります。

したがって、古田氏が、珊瑚樹を

南海の珊瑚と考えるのが、普通の理解

と解釈するのは、理解できません。珊瑚樹<sup>サンゴジュ</sup>は、珊瑚の樹です。

なお、珊瑚樹の分布について『原色日本植物図鑑 木本編 [I]』\*2では、

本州(千葉県以西の海岸)・四国・九州・琉球・朝鮮南部・台湾・中国(湖北、福建、広東)・インド(カーシア)・インドシナ・フィリピン・セレベス

(『原色日本植物図鑑 木本編 [I]』33頁)

とあります。やはり、珊瑚樹の分布は、朝鮮南部以南であって朝鮮半島北部には分布しないことが確認できます。

以上のとおり、好太王碑にある「珊瑚樹」の記述は、「南海の珊瑚」ではありませんので、百済の属国である舩牟羅国が南海にある証拠にはならないと思います。

\*1 『新訂牧野新日本植物図鑑』牧野富太郎著、1989年7月、北隆館

\*2 『原色日本植物図鑑 木本編 [I]』：北村四郎・村田源共著、1971年11月、保育社

### 3 舩牟羅國と舩羅國

次に第2点は、『隋書』百濟伝の舩牟羅國に関してです。古田氏は、舩牟羅國を舩羅國ではないとされますが、これは中国史料に基づいた見解であるとは思えません。

『三国史記』\*1 百濟本紀(東城王條)には、  
王以耽羅不修貢賦親征至武珍州耽羅聞之遣使乞  
罪乃止 耽羅即耽牟羅

(『三国史記』下、504頁)

と記述されています。この「耽羅即耽牟羅」の記述の意味は、「耽羅はすなわち耽牟羅なり」です。

耽羅＝耽牟羅です。

「舩」と「耽」の字が違いますが、これは『隋書』と『北史』を対照すれば、次のとおり明らかに異体字です。

史料	記述内容
『隋書』 東夷伝	〈百濟〉 平陳之歲有一戰船漂至海東舩牟羅國 其南海行三月有舩牟羅國
	〈倭国〉 度百濟行至竹島南望舩羅國
『北史』 列伝第 八十二	〈百濟〉 平陳之歲戰船漂至海東耽牟羅國 其南海行三月有耽牟羅國
	〈倭国〉 度百濟行至竹島南望耽羅國

『隋書』で「舩」と表記されているところが、『北史』では「耽」や「耽」の字が使用されています。「舩」は、「耽」や「耽」の字体と同じ意味・発音を持つものの表記に差異がある文字、異体字と考えて良いでしょう。

舩羅＝舩牟羅です。

したがって、舩牟羅國は、舩羅國です。

すなわち、『隋書』百濟伝の「其南海行三月有舩牟羅國」の舩牟羅國と、『隋書』倭國伝の「度

百濟行至竹島南望舩羅國」の舩羅國は、同じ國を指していると思います。

### 4 鹿の生育地

次に第3点は、『隋書』百濟伝の「麋鹿多し」です。古田氏は好太王碑の珊瑚樹については注目されましたが、『隋書』百濟伝の「麋鹿多し」の記述を示しながら「麋鹿」の生息について言及されていません。古田氏は「麋鹿」に「しょうろく」とふりがなを付けておられますが、これは「のろじか」です。

舩牟羅國には麋鹿が多いと記述されているのです。麋鹿は、ユーラシア大陸中高緯度の中国や朝鮮半島、濟州島の草原に生息する小型の鹿です。今も濟州島には、臀部が白く尾が短いノロジカが生息しています。

これに対して、ボルネオ島などマレーシアやインドネシアなどの南海の国々に生息する鹿は、大型のルサジカ、小型のホエジカ、超小型のマレーマメジカであり、ノロジカは生息していません。

したがって、舩牟羅國は、麋鹿の生息区域から、南海にはないことが明らかです。舩牟羅國を濟州島とすれば、濟州島は麋鹿の生息区域ですから、よく理解できます。

### 5 舩牟羅國の形状

次に第4点は、舩牟羅國の形についてです。古田氏は、舩牟羅國を「南北千余里、東西数百里」だから、縦長の形とされます。そして縦長だから横長の濟州島ではないとされます。しかし「南北千余里、東西数百里」の記述方法は、「南辺、北辺が千余里で、東辺、西辺が数百里」の横長の形を意味しています。この記述方法について、私は、『魏志』韓伝の韓國の東や西の国境が「東(辺)、西(辺)以海爲限」とされていることや、『隋書』西域伝高昌の条の「其境東(辺)西(辺)三百里 南(辺)北(辺)五百里四面多大山」がトルファン盆地の横長の形であることなどの例を示し明らかにしているところです。

\*1 『三国史記』:『完訳 三国史記』、金富軾著、金思燁訳、昭和56年2月、六興出版

しかも、「南辺、北辺が千余里で、東辺、西辺が数百里」は、魏朝短里で、済州島の形にぴったり合致します。したがって、その形からも舩牟羅國は済州島であることが支持されています。〈参考：拙著「東西五月行南北三月行について 1・2」（『東海の古代』138・140号〈2012年2・4月〉）等に詳述〉

## 6 隋軍船の漂流譚

次に第5点は、『隋書』の「隋の軍船の漂流譚」です。これに関する原文には、

平陳之歳有一戰船漂至海東舩牟羅國

（『隋書』百濟伝）

とあります。隋の軍船が漂流して至ったのは「海東」です。海東の舩牟羅國です。

すなわち、舩牟羅國は「海東」にあったことが『隋書』の記述から明確です。ボルネオ島などのマレーシアやインドネシアなどは「海南」であって「海東」ではありません。

済州島は、もちろん「海東」にありますので、「海東」の舩牟羅國は、済州島であることを支持しています。

なお、「海南」の国のことが記述されている『隋書』南蛮伝には、舩牟羅國（舩羅國）の記述は出現せず、舩牟羅國（舩羅國）は、南蛮にある國ではないことを裏付けています。

## 7 海行三月

最後に第6点は、「海行三月」についてです。

古田氏は、先に示したとおり

「海行三月」というのも、その経験にたっているんでしょう。だから、これは単なる噂話を書いたものではない。

と述べておられます。「海行三月」は、隋使が実際にかけたのか、伝聞によるものかはともかく、隋使が責任を持って正式に報告した内容でしょうから、うわさ話や無責任な記述ではないと考えるべきでしょう。記述内容が間違っていると否定してはなりません。古田氏の意見にまったく同感です。

しかしながら、古田氏は『隋書』百濟伝の「其

南海行三月有舩牟羅國」の記述について、

舩牟羅國へは、南へ船で三ヶ月かかるところにあると書いてある。済州島まで、三ヶ月もかかりませんわね。

と述べておられます。

古田氏の言われるとおり、現代の感覚からは、一般的に済州島まで三ヶ月かかるとは思われません。だからといって、舩牟羅國は遠方にあるとは必ずしも言えないと思います。

『魏略』西戎伝には、

遇風利二月到風遲或一歳 無風或三歳

と記載されており、風の状況によっては二ヶ月かかるところが三年かかることもあるとされます。無風と順風では、行程に1.8倍の差があるのです。

〈参考：拙著「『隋書』倭国伝の竹島と舩羅國」（『東海の古代』144号〈2012年8月〉）〉

この『魏略』西戎伝を参考にすれば、海行にかかる行程は、気象条件など自然の力が強く影響するため、かかる日数の変動幅が大きいと言えます。黄海暖流の海流の向きや風向きによっては、百濟から済州島まで三ヶ月かからないとは必ずしも断言できないのです。こうした事例があるのですから、現代の感覚で、百濟から済州島まで三ヶ月はかからないと決めつけてはならないと思います。

すなわち「海行三月」は、舩牟羅國（舩羅國）が済州島であることを決定づけるものではありませんが、否定する記述であるともいえないと思います。

## 8 まとめ

以上、第1点の好太王碑の「珊瑚樹」から、第5点の「海東舩牟羅國」までに示したとおり、舩牟羅國（舩羅國）は、済州島であることが明白であると思います。古田氏は「海行三月」の記述にこだわられたため、舩牟羅國（舩羅國）は遠く南方にあるボルネオ島に想定されたと思われる。しかし、古田氏は、ボルネオ島まで「海行三月」であるのかどうか、及びボルネオ島が「南北千余里、東西数百里」であることの

論証をなされておられないと思われます。舩牟羅國（舩羅國）が濟州島ではないことを示すために、いつもの緻密かつ明快な論述がなされず、直感的な思考になってしまったように私には思われます。

舩牟羅國（舩羅國）が濟州島であるとする前提に立つと、『隋書』倭國伝の倭國への行程において、竹島は、舩羅國（濟州島）を望める位置にある朝鮮半島南西部であることが、文献上からよく理解できます。そして、朝鮮半島南西部に竹島の地名が、島名だけではなく、里、村、山などの名として、全羅南道チヨルナムドを中心として、その一帯に数多く現存していることを私は発見しました。これは「阿蘇山」や「竹斯」などと同じように1400年前の地名が引き続き現在まで残っていることを示しているのだと思います。

これまで述べてきた中国史料の内容とあわせて、竹島の地名が朝鮮半島南西部に現存している事実から、『隋書』倭國伝に記述されている

度百濟行至竹島南望舩羅國經都斯麻國迴在大海中

の竹島は、朝鮮半島南西部にあることは確かであると思ひます。

なお、詳しくは、別冊の“『隋書』倭國伝の「竹島」”をご笑覧下さい。

## 難波長柄豊碕宮と難波の朝<sup>みかど</sup>

名古屋市 佐藤章司

### はじめに

古田武彦氏は『なかつた—真実の歴史学—』5号\*1の24～27頁で、難波長柄豊碕宮は大阪市の大坂城公園の南に隣接する（法円坂）難波宮ではなく、博多湾に面して突き出している現愛宕神社の地であると述べている。

これに対し筆者は賛意を表するものであるが、難波長柄豊碕宮は難波宮である、としているところの見解は相違するので、「難波は筑紫にある」ということを本題の基本として、以下その理由を述べる。

### 1 難波長柄豊碕宮は筑紫にある

『日本書紀』孝徳紀

① 白雉四年(653年)夏五月十二日、大唐に遣わす大使小山上吉士長丹・副使小乙上吉士駒・学問僧道嚴・道通・道光・恵施・覚勝・弁正・恵照・僧忍・知聰・道昭・定恵・安達・造観・学生巨勢臣葉・氷連老人 —……— すべて百二十一人が一つの船に乗った。室原首御田を送使とした。

第二組の大使大山下高田首根麻呂、副使小乙上掃守連小麻呂、学問僧道福・義尚、すべて百二十人が別の一つの船に乗った。土師連八手を送使とした。

……

秋七月、大唐に遣わされる使人高田根麻呂らが薩摩の曲くまと竹島の間で船が衝突し沈没して死んだ。

……

(講談社学術文庫『日本書紀』下、192・193頁)

② 白雉五年(654年)秋七月二十四日、西海使(…吉士長丹らが百濟・新羅の送使と共に筑紫についた。

この月、西海使らが唐の天子にお目にかかり、多くの文書・宝物を得たことをほめて、小山上大使吉士長丹に少花下を授け、二百戸の封戸を賜った。また呉氏の姓を賜った。

小乙上副使吉士駒に小山上を授けられた。

(講談社学術文庫『日本書紀』下、195頁)

筑紫は出発地（有明海側）であり、到着地（博多湾側）なのだろう。すなわちこの遣使の主体は九州王朝なのではなかろうか。だから第二船が薩摩で沈没するという事故に遭遇したのだろうし、筑紫に着いて直ぐに、吉士長丹・吉士駒らが恩賞を賜っていることから、この遣唐使は筑紫で任務を終えている。又、学生として留学した氷連ひのむらじおきな老人は、この後百濟救援の際、筑紫

\*1 『なかつた—真実の歴史学—』5号：古田武彦直接編集、2008年6月、ミネルヴァ書房

君薩夜馬らと唐の捕虜になっている。

この白雉4年の遺使は、(白雉年号は『日本書紀』では5年間、『二中歴』では9年間を持っている。)筑紫に都をおく九州王朝の遺使で間違いなかろう。その宮室の名は「難波長柄豊碕宮」以外にない。

なお、孝徳天皇は、『日本書紀』では大化5年間と白雉5年間を統治した天皇とされるが、『二中歴』では大化は695～700年の6年間、白雉は652～660年の9年間であり、孝徳天皇が大化と白雉を統治することなどあり得ない。事実、『新唐書』では

#### 永徽初其王孝徳即位改元曰白雉

(『新唐書』日本伝)

と記され、大宝年号以前では、この孝徳だけが「年号」を持つ天皇となっている。

遣唐使の大使小山上吉士長丹が少花下に、副使小乙上吉士駒が小山上に昇進した記事(①②の白雉年号記事)の『日本書紀』孝徳紀は九州王朝の史書である『倭国日本紀(仮)』から盗用し転用して編纂されている、ということになるうし、大化元年(645年)の「七種十三階」の冠位制定記事も九州王朝の史書からの盗用となる。この様に考えた時に『続日本紀』に記す、大宝元年3月21日条

#### 始依新令改制官名位号

(新日本古典文学大系『続日本紀』一、36頁)

が生きてくる。すなわち大和朝廷の冠位制度は大宝律令が始めてだった、ということになるう。それまでの冠位制度は九州王朝が制定していた。(冠位制度は別に記述する。)

難波長柄豊碕宮関連の記事を『日本書紀』から概略列記すると

A：大化元年(645年)

冬12月9日 天皇は都を難波長柄豊碕に移された。

B：白雉2年(651年)

冬12月晦日……この時、天皇は大郡おおごおりから還つて、新宮においでになった。この宮を名付けて難

波長柄豊碕宮という。

C：白雉3年(652年)

秋9月 豊碕宮の造営は終わった。

D：白雉5年(654年)

冬10月1日 皇太子は天皇が病気になるれたと聞かされて……難波宮に赴かれた。

10日 天皇は正殿で崩御された。

(講談社学術文庫『日本書紀』下、165・191・192・196頁)

Aの大化元年の難波長柄豊碕への遷宮記事は「大化」年号\*1と共に、『日本書紀』編纂者の改竄であって、Bの白雉2年に大郡おおごおりから遷宮したとする記事が本来であろう。大郡からの遷居であるから「難波一長柄一豊碕」と細かく表示しなくても、「長柄宮」か「豊碕宮」で十分で、事実、豊碕宮と記載されている。難波長柄豊碕宮＝豊碕宮であって、難波長柄豊碕宮は難波宮ではない、という認識が必要となるう。

又、『二中歴』の白雉年号(652～661年)は9年間であって、孝徳天皇(白雉年号期間を統治した天子)は白雉5年に難波宮で崩御したにも関わらず、改元されることなく白雉年号は9年まで続いている。この不自然さは孝徳紀には

①九州王朝の天子：難波長柄豊碕宮で統治

②大和王朝の大王：難波宮、ただし前期難波宮ではない。

の異なった別々の人格が合成されて記述されているため、と考えると良いであろう。(例えば神功皇后紀の卑弥呼・耆与・倭王旨のように複合した人物が合成されているのが『日本書紀』の記述の特徴のひとつになっている。)

Dの記事は、大和王朝の大王の崩御記事とその宮名である。天武紀に記述されている難波宮(前期難波宮)は白雉5年には未だ完成していない。

上のAとBの記事は元々違うものを「難波宮＝難波長柄豊碕」と、結び付けているもので『日本書紀』の改竄結果でもある。

\*1 大化：『日本書紀』では645～651年、『二中歴』では695～701年

## 2 難波は筑紫に存在した。

以下、『日本書紀』から検証する。継体6年(512年)冬12月條

冬十二月、百済が使を送り調を奉った。別に上表文を奉って任那国の上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁の四県を欲しいと願った。哆唎の国守、穗積臣押山が秦上して「……」といった。大伴大連金村も意見に同調され奏上した。……

物部大連鹿火を勅を伝える使とされた。彼がまさに難波館に出向き、百済の使に勅を伝えようという時、……

そこで改めて別人に勅みことりされた。賜物と一緒に制旨をつけ、上表文に基づく任那の四県を与えられた。

(講談社学術文庫『日本書紀』上、352・353頁)

これは、「任那四県の割譲」といわれている事件であるが、この記事に登場する人物は穂積臣押山・大伴大連金村・物部大連鹿火であって、割譲の詔勅を与えた要の継体天皇が登場しない不思議さがある。『後漢書』～『隋書』に記述される倭国(倭国)は九州王朝であって大和王朝ではないのであるから、任那4県の割譲記事も九州王朝史書類からの盗用で間違いなかろう。これが継体天皇が登場しない(不記載)理由であり、百済王の名前や使者の名前の記載がない理由でもあろう。(『日本書紀』編纂者は百済王の名前を知らなかったし、百済王からの上表文も見えていない。)穂積臣押山・大伴大連金村・物部大連鹿火らは九州王朝の人物であるという認識が必要である。百済と国交を持ったのは『旧唐書』に記述される倭国=九州王朝であって、倭国王は「武」もしくは「日十大王年(「年」は中国風の一字名)であって、百済国王は武寧王である。継体天皇(507～531年)の大和王朝=日本国ではない。又、百済の使者が滞在した難波館(岩波文庫『日本書紀』では注書きで大坂市内と記す。)は九州王朝の中枢地である筑紫にあった、ということになる。これを証明するものが「隅田八幡神社の人物画像鏡の銘文」と『日本書紀』継体紀にある任那割譲記事の分析結果で

ある。

503年8月(癸未年)には「難波は筑紫にある」ということが歴史を紐解くうえで重要である。こう考えると

①難波長柄豊碓宮

②四天王寺(推古元年〈593年〉難波に建立された)

は筑紫にあったことが見えてくる。と同時に、この時代には難波は大阪(河内)にあったとする論者\*1は、このことを証明することが必要となろう。

## 3 難波長柄豊碓宮と味経宮

白雉元年(650年)1月條

白雉元年一月一日、天子は御車(原文は車駕)で味経宮(……)にお越しになり、拝賀の礼を行われた。この日に御車(原文は車駕)は宮に帰られた。

(講談社学術文庫『日本書紀』下、187頁)

との記述から、難波長柄豊碓宮と味経宮間是一日行程の距離内にあるということが出来る。また、白雉2年(651年)條で

冬十二月の晦日、味経宮で二千百余人の僧尼を招いて一切経を読ませられた。

(講談社学術文庫『日本書紀』下、191頁)

とも記述している。

『二中歴』によれば、僧要年間(635～639年)に、

自唐一切経三千廿卷渡(唐自より一切経三千二十卷渡る)

(古田武彦著『壬申大乱』202頁)

とあり、「僧要」年号は九州年号の時代でもあることから、唐から九州王朝に渡来したことに間違いなかろう。これから、12～16年後に二千百余人の僧尼による一切経が読経された味経宮は、大郡宮・難波長柄豊碓宮と共に筑紫にあったことになる。

\*1 直木孝次郎(「中公文庫『日本の歴史』2-古代国家の成立-」、改版2004年6月、233・235頁)等



#### 4 難波の朝とは難波宮ではなく難波長柄豊碕宮である

齊明天皇元年（655年）條

秋七月十一日、難波の朝<sup>みかど</sup>で、北(越)の蝦夷九十九人、東(陸奥)の蝦夷九十五人に饗応された。…  
…なお柵養の蝦夷九人、津軽の蝦夷六人に冠位それぞれ二階を与えられた

(講談社学術文庫『日本書紀』下、198頁)

と、記されているが、この蝦夷を饗応した「難波の朝廷」はどこに存在していたか？ を以下に検討する。

A：齊明天皇5年（659年）條

秋7月3日、小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥を唐に遣わした。その時、陸奥の蝦夷男女二人を唐の天子にお目につけた。

(講談社学術文庫『日本書紀』下、207頁)

B：『唐会要』蝦夷国條

蝦夷。海の嶋の中の小国である。……

顯慶四年(659年)10月倭国の使者に随行して入朝した。(『唐会要』蝦夷国)

蝦夷の唐への入国は『日本書紀』と『唐会要』とも659年(『二中歴』では白雉8年)と共通し、倭国使者と共に入朝している。この倭国とは『旧唐書』でいう倭国と同一であろうから、難波長柄豊碕宮での饗応ではなかったか。

齊明5年は『二中歴』に照らしてみると白雉8年であり、この間、孝徳天皇白雉3年(652年、『二中歴』では白雉元年)の豊碕宮が完成してから、齊明天皇5年までは難波長柄豊碕宮で統治している。これは蝦夷饗応などの結果だと思われるが、陸奥国の蝦夷が百済救援のために倭国と共に参戦していて、当時の倭国(九州王朝)と蝦夷国の緊密な関係が偲ばれる。それを示すものとして、慶雲4年(707年)5月26日に百済救援から44年後、陸奥国信太郡<sup>みぶいおたり</sup>の壬生五百足らが唐から帰還し、恩典を受けている記事からも、蝦夷を饗応した倭国の首都の難波長柄豊碕宮は筑紫ある、と言えるであろう。

#### 5 隅田八幡神社の人物画像鏡銘文から難波は筑紫であることを検証する

和歌山県橋本市に所在する隅田八幡神社が所蔵する「人物画像鏡」(国宝)の鏡背に48字の銘文があり、正確な出土年代や出土地は定かではないが、ここではこの鏡の銘文を検証し、百済の武寧王から倭王年(中国風字名)に任那の4県を割譲して与えた見返りにプレゼントされた鏡であり、百済の使者が滞在した難波は筑紫にあったことを証明する。

(1) 銘文・意訳

癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長寿遣開中費直穢人今州利二人等取白上同二百旱作此竟

癸未年(503年)八月、(倭王)日十大王・年と男弟王が意柴沙加の宮におられる時、(百済王の)斯麻が長寿を念じて開中骨直、穢人今州利の二人らを遣わし、白上同二百旱を取ってこの鏡を作る。

(2) 検討内容

① 画像鏡に表記されている人名は如何なる人物か

この時代、銘文入り鏡のプレゼントが出来る人物と言えれば大枠限定される。しかも受け取り手は「大王」であり「王」の位取りであって、国と国との外交による献上なり下賜なりのプレゼントと見るのが適切であろう。すなわち、「斯麻」は百済国の武寧王(502年即位)と理解すれば、癸未年は503年となる。また、『武寧王墓誌』

寧東大將軍百濟斯麻王 年六十二歳 癸卯年五月丙戌朔七日壬辰崩到

乙巳年八月癸酉朔十二日甲申 安登冠大墓立志如左

から、人物画像鏡銘文の「斯麻=武寧王墓誌の斯麻」で文字が一致する。開中費直は名前表記からみて倭人系百済人であろう。今州利は百済系の穢人か？ 百済国内において複数の民族が混在していた。そんな状況が覗える。

② 癸未年八月日十大王年男弟王

斯麻の中国風一字名は「隆」であり、余は

姓+隆(一字名)であり、百済国や倭国においても倭武のように使用されていた。その字名が「年」である。銘文は

「癸未年八月」十「日十大王年」十「男弟王」

とくぎることが出来る。「日十大王年」はヒト大王・年(中国風一字名)であり、大王→王となる倭国の兄弟統治体制が偲ばれる。

銘文を「癸未年八月日十」と区切って更に日と十を前後させて八月十日と解説している論者が多いと思われるが、銘文の解説は安易過ぎないだろうか?

この「年」は讚(?~425)・珍(425~?)・済(?~451)・興(451~462)・武に続く大王名であろう。

### ③ 意柴沙加宮とは

「イシサカ」?或いは「オシサカ」であろう。

503年に在位していた武烈天皇は

長谷の列木宮(ナミキ)・・・『古事記』

泊瀬の列城宮(ナミキ)・・・『日本書紀』

であって、銘文とは合致しないし、大和王朝には兄弟統治体制(大王と男弟王)がない。

東アジアにおいて百済国と対応している倭国は九州王朝側であることを、この鏡の銘文は語っている。

### ④ 『日本書紀』から検証する

#### A 武烈4年(502年)條

この年、百済の末多王が無道を行い、民を苦しめた。国人はついに王を捨てて、嶋王を立てた。これが武寧王である。

#### B 継体17年(523年)條

十七年夏五月、百済の武寧王が薨じた

(講談社学術文庫『日本書紀』上、343・358頁)

癸未年(503年)の百済王は武寧王であるから、このことから、人物画像鏡銘文の斯麻は『日本書紀』で記されている嶋王である。

この解説結果から人物画像鏡は百済製(百済で作られた)としてきたが、直木孝次郎は『古代日本金石文の謎』\*1 10頁で、この人

物画像鏡の銘文は、日本で作られたとしている。男弟王をヲオト王と読んで継体天皇にあて、意柴抄加宮を大和盆地南部の忍坂の地名とし、これを根拠に「明らかに日本製」である。と述べている。

しかし銘文は日十大王と男弟王の二人の王が刻まれているし、癸未年(503年)は武烈天皇の在世である。しかも、意柴沙加宮はオシサカ(或いはイシサカ)で忍坂はオサカであってオシサカではない。これらからも、人物画像鏡「日本製」説は成り立たない。この鏡の発見や出土状況は不明となっているが、滅んだ倭国(九州王朝)から隈田八幡神社に齎された、ということである。

## 『日本書紀』記事の異説(2)

—古代史覚書帳—

瀬戸市 林 伸禧

### 3 天智紀

#### (1) 天智天皇在位

『日本書紀』では、天智天皇の在位期間は10年であるが、異説には在位11年の文献が多々ある。在位10年説と11年説の比較について整理すると、表3-1のとおりであり、その関連文献は、表3-2のとおりである。

これらとともに、詳細に文献を調べたところ、1年のずれがある記事が判明したので、表3-3に示す。

#### (2) 天智天皇の御子

##### ア 異説

『扶桑略記』第五の天智天皇條に

天智天皇 四十代。号田原天皇 治十年 男六人  
女十三人 三人即位 但一人不載系図

(『改定 史籍集覧』第一冊、『校本扶桑略記』58頁)

と記述されている。

\*1 『古代日本金石文の謎』: エコール・ド・ロイヤル「古代日本を考える」15巻『古代日本金石文の謎— 金印論争から太安万侶墓誌まで—』、直木孝次郎始め6名著、1991年11月、学生社

『日本書紀』では、皇子4人、皇女10人の14人である。『日本書紀』と『扶桑略記』等の文献とを比較すると、表4及び表5の通り、その人数はまちまちである。

イ 天智天皇の御子数

① 『一代要記』では、皇子を「建弭皇子、川嶋皇子、施基皇子、大友皇子、**榎井親王**」の5人と記述している。

但し、異説に、**榎井親王は、施基皇子の子とある。**

② 『扶桑略記』(金勝院本)では、高市皇子を天智天皇の子としている。

持統天皇條

同七月日以高市皇子爲太政大臣<sup>卅七</sup> 天地天皇三男也

(<sup>天理</sup>善本叢書『古代史籍續集』、425頁)

但し、「史籍集覽(文政三年刊本)・国史大系(文政三年刊本)」では、次のとおり「天武天皇三男」と記述されている。

・(四年庚寅七月)同月五日 以高市皇子爲太政大臣<sup>五十七</sup> 天武天皇三男也

(『<sup>改定</sup>史籍集覽』第一冊、『校本扶桑略記』66頁)

・(四年庚寅)七月五日 以高市皇子爲太政大臣<sup>卅七</sup> 天武天皇三男也

(『<sup>新訂</sup>増補 国史大系』第十二卷、『扶桑略記』67頁)

③ 以上から、『日本書紀』の4人の皇子に、榎井親王(『一代要記』)と高市皇子(『扶桑略記』)を加えると6人となる。

ウ 検討課題

① 「三人即位、但一人不載系圖」の天皇は「大友皇子、持統皇子、元明天皇」を想定されていると思われるが、持統は不即位のため、本来は「大友皇子、高市皇子、元明天皇」であると思われる。

高市皇子即位説、持統天皇不即位説については、後述する。

② 『日本書紀』では、記事の冒頭に時期を示すのに「日干支」を記述するのが通例であるが、天智七年五月五日條では、

五月五日 天皇縱獵於蒲生野 于時 大皇弟・諸王・内臣及群臣 皆悉從焉

(日本古典文学大系『日本書紀』下、369頁)

とあり、「朔干支、日干支」が記述されておらず、数字で記述されている。例外中の例外である。なぜ干支で記述されなかったのかが、今後の検討課題である。

③ 『扶桑略記』(金勝院本)\*1では、『日本書紀』で天皇としてしない「神功皇后、飯豊皇女」を天皇として記述し、大友皇子は天皇ではなく「皇太子」になったと記述している。

なお、『扶桑略記』(文政3年刊本)では、大友皇子が天皇に即位したとしている。記述されている内容にかなり異なっている点があるので、それらを精査する必要がある。

また、神功天皇と記述されている外国史料には、中国史書『宋史』の雍熙元(984)年に日本僧裔然が持参した「王代記」、及び朝鮮史書『海東諸国紀』がある。

表3-1 天智天皇在位10・11年説比較

天智11年説	天皇	齊明	天智											天武
	干支	7年庚申	元年辛酉	2年壬戌	3年癸亥	4年甲子	5年乙丑	6年丙寅	7年丁卯	8年戊辰	9年己巳	10年庚午	11年辛未	元年壬申
天智10年説 (日本書紀)	天皇	齊明		天智										天武
	干支	齊明6年庚申	齊明7年辛酉	元年壬戌	2年癸亥	3年甲子	4年乙丑	5年丙寅	6年丁卯	7年戊辰	8年己巳	9年庚午	10年辛未	天武元年壬申

\*1 『扶桑略記』(金勝院本)：<sup>天理</sup>善本叢書<sup>和書</sup>第13卷『古代史籍續集』、昭和50年1月、八木書店

表3-2

## 天智天皇在位11年説の文献

文献	記事	出典	頁
二中歴	第一人代歴 天智十一載 舒明太子 ※『日本書紀』：十年	『 <sup>改定</sup> 史籍集覽』 第廿三冊『二中歴』	5
紀氏系図	紀大人 御史大夫大納言正三位 號大紫臣 天智十一年辛未正月五日 始任 御史大夫 …… ※① 天智十一年辛未 → 天智元年辛酉 ※② 『日本書紀』天智十年（辛未）條 十年春正月己亥朔 癸卯 大錦上中臣金連命宣神事 是日 以大友皇子拜太政大臣 以蘇我赤兄臣爲左大臣 以中臣金 連爲右大臣 以蘇我果安臣・巨勢人臣・紀大臣始任御史大夫 （日本古典文学大系『日本書紀』下、375頁） ※天智十年辛未 → 天智元年壬戌	『新稿群書類従』 *1 第三卷	612
懷風藻	淡海朝大友皇子 二首 皇太子者 淡海帝之長子也 …… 年甫弱冠 拜太政大臣 總百揆以試之 皇子博學多通 有文武材 幹 始親萬機 群下畏莫不肅然 年二十三 立爲皇太子 …… 會壬申年亂 天命不遂 時年二十五 ※大友皇子と天智・天武天皇との関係 天皇 : 天智 天智 天武 年干支 : 十年庚午 十一年辛未 元年壬申 大友皇子 : 23歳 24歳 25歳	『群書類従』 第八輯	427
歴代皇紀	天智天皇 元年壬戌 治十年 <sup>或十年或</sup> <sub>四十一年</sub> ※① 四十一年→四年 ・『日本書紀』天武即位前紀 天命開別天皇元年 立爲東宮 四年冬十月庚辰 天皇臥病以痛之甚矣 （日本古典文学大系『日本書紀』下、383頁） ・天智紀 （天智十年冬十月）庚辰 天皇疾病弥留 （日本古典文学大系『日本書紀』下、379頁） ② 十年→十一年 「治十年」が細字で「或十年」は不合理、或十一年？ ③ 以上から「治十年 <sup>或十年或</sup> <sub>四十一年</sub> 」は「治十年 <sup>或十一年</sup> <sub>或四年</sub> 」と思われる。	『 <sup>改定</sup> 史籍集覽』 第十八冊 『校本歴代皇紀』	27
革命勘文	一 今年當大變革命年事 …… 已上一部 自神倭磐余彦天皇即位辛酉年至于天豐重日足姬天皇 七年庚申年 合千三百廿年已畢	『群書類従』 第二十六輯	197

\*1 『新稿群書類従』：川俣馨一（編集・発行者）、昭和5(1930)年5月20日、内外書籍

	<p>※天豐重日足姬天皇七年庚申→(翌年)天智元年辛酉</p> <p>……</p> <p>一 薨之首</p> <p>……</p> <p>今年辛酉 <small>昌泰四年也</small></p> <p>謹案 自天智天皇即位辛酉之年 至于去年庚申 合二百四十年</p> <p>※『日本書紀』</p> <p>(齊明七年辛酉)秋七月甲午朔丁巳 天皇崩于朝倉宮</p> <p>(天智)七年(戊辰)春正月丙戌朔戊子 皇太子即天皇位</p> <p><small>或本云 六年歲次 丁卯三月 即位</small> (日本古典文学大系『日本書紀』下、351・367頁)</p>		
万葉集	<p>18番</p> <p>日本書紀曰 六年丙寅春三月辛酉朔己卯 還都于近江</p> <p>※① 天智六年丙寅→天智元年辛酉</p> <p>② 『日本書紀』天智六年(丁卯)三月條</p> <p>(天智六年)三月辛酉朔己卯 還都于近江</p> <p>(日本古典文学大系『日本書紀』下、367頁)</p> <p>21番</p> <p>紀曰 天皇七年丁卯夏五月五日 縱獵於蒲生野 于時 大皇弟・諸王・内臣及群臣 皆悉從焉</p> <p>※③ 天智七年丁卯→天智元年辛酉</p> <p>④ 『日本書紀』天智七年(戊辰)五月條</p> <p>(天智七年)五月五日 天皇縱獵於蒲生野 于時 大皇弟・諸王・内臣及群臣、皆悉從焉</p> <p>(日本古典文学大系『日本書紀』下、369頁)</p>	日本古典文学大系『万葉集』一	20
			20

表3-3 天智天皇在位の1年のずれに関する文献

文献	記 事	出 典	頁
続日本紀	<p>(文武二年八月戊子朔)</p> <p>丁未 修理高安城 <small>天智天皇 五年築城也</small></p> <p>※① 『日本書紀』天智六年(丁卯)十一月條</p> <p>是月 築倭國高安城 讚吉國山田郡屋嶋城 對馬國金田城</p> <p>※② 『日本書紀』と『続日本紀』とに1年のずれがある。高安城の修理は「天智六年丙寅」であったが、『日本書紀』では「天智六年」から、「天智六年丁卯」とした。修理は「丙寅」年とされていたので、『続日本紀』では「天智五年」と記述したと推測する。</p>	新日本古典文学大系『続日本紀』一	12
日本書紀(天智七年即位條細字)	<p>七年春正月丙戌朔戊子 皇太子即天皇位 <small>或本云 六年歲次 丁卯三月 即位</small></p> <p>※① 六年三月は近江遷都と記述されている。異説では、遷都と即位を同時に行ったことになるが、疑問が残る。</p> <p>※② 本文(七年戊辰)と細字(六年丁卯)に一年ずれがある。これは、「天智七年丁卯」が即位年であったが、『日本書紀』では干支を一年ずらして「七年戊辰」とした。細字は「丁卯」年から「六年丁卯」と記述したと思われる。</p>	日本古典文学大系『日本書紀』下	367

表 4

天智天皇の御子

文 献	皇子	皇女	計	天皇即位
日本書紀	4	10	14	持統(鸕野)、元明(阿陪)
扶桑略記	6	13	19	天皇となった皇子名の記述無く、「三人即位、但一人不載系圖」と記述されている。
一代要記	5	10	15	兔野皇女(高天原廣野姫)、阿閉(日本根子天津御代豊國成姫)
本朝皇胤 紹運録	(4) 5	(10) 9	14	持統(菟野)、元明(阿閉)
帝王編年録	4	8	12	菟野皇女(持統天皇)、阿閉(元明天皇)

※ 『本朝皇胤紹運録』では、皇子を、「建珥皇子、大友皇子、施基皇子、飛香皇子、川嶋皇子」の5人と記述しているが、「飛香皇子」は「飛香皇女」の誤りと思われる。その理由は

① 飛香皇子の母は「阿部倉橋麿大臣女橘姫」で、飛香皇子と新田部皇女の2人を産んだとされており、他の文献でも「橘姫」子を「飛鳥皇女(明日香皇女)」と「新田部皇女」の2人としている。

・『本朝皇胤紹運録』：飛香皇子叙淨廣肆 文武四年薨  
母橘姫 阿部倉橋麿大臣女 (『群書類従』第5輯、28頁)

・『日本書紀』：次有阿部倉梯麻呂大臣女 日橘姫 生飛鳥皇女與新田部皇女  
(日本古典文学大系『日本書紀』下、369頁)

・『一代要記』：明日香皇女母橘姫叙淨廣肆 文  
武天皇四年四月薨 (『改定 史籍集覧』第一冊、『一代要記』24頁)

・『帝王編年録』：明日香皇女母橘  
姫 (『新訂 増補 国史大系』第十二卷、『帝王編年録』135頁)

② 飛香皇子は文武四年四月死去されたとしているが、『続日本紀』では、同年同月に「明日香皇女」の死去記事が記述されている。

(文武四年)四月癸未 淨廣肆明日香皇女薨 遣史弔賻 天智天皇之皇女也

(新日本古典文学大系『続日本紀』一、26頁)

表 5

天智天皇の御子(詳細)

区分	日本書紀		扶桑略記	一代要記	本朝皇胤紹運録	帝王編年録
	子	母				
皇子	建皇子	蘇我山田石川麻呂大臣女 遠智娘	(建珥皇子)	建珥皇子	建珥皇子	建珥皇子
	川嶋皇子	忍海造小龍女 色夫古娘	(川嶋皇子)	川島皇子	川嶋皇子	河嶋皇子
	施基皇子	越道君 伊羅都賣	(施基皇子)	施基皇子	施基皇子	施基皇子
	大友皇子	伊賀采女 宅子娘	(大友皇子)	大友皇子	大友皇子	大友皇子
	—		(榎井親王)	榎井親王	—	—
	—		(高市皇子)	—	—	—
	計4人		計6人	計5人	計4人	計4人

皇女	大田皇女	蘇我山田石川麻呂大臣女 遠智娘	不詳	大田皇女	太田皇女	大田皇女	
	鸕野皇女			兔野皇女	持統天皇(菟野)	菟野皇女	
	御名部皇女	遠智娘弟 姪娘		御名部皇女	御名部皇女	御名部皇女	
	阿陪皇女			阿閉皇女	元明天皇(阿閉)	阿閉皇女	
	飛鳥皇女	阿倍倉梯麻呂大臣女 橘娘		明日香皇女	飛香皇子	明日香皇女	
	新田部皇女			新田部皇女	新田部皇女	新田部皇女	
	山邊皇女	蘇我赤兄大臣女 常陸娘		山邊皇女	山邊皇女	山邊皇女	
	大江皇女	忍海造小龍女 色夫古娘		大江皇女	大江皇女	—	
	泉皇女			泉皇女	泉皇女	—	
	水主皇女	栗隈首徳萬女 黒媛娘		水主皇女	水主皇女	水主皇女	
	計10人			計13人	計10人	計10人	計8人
	合計14人			合計19人	合計15人	合計14人	合計12人

※ 1 『扶桑略記』の皇子名は筆者推定。

2 榎井親王は『一代要記』、高市皇子は『扶桑略記』(金勝本)より推定した。

## 12月例会報告

### ○ 朝鮮半島南部に倭地あり(その1) 追加版

名古屋市 佐藤章司

『日本書紀』継体6年(512年)條に

冬12月、百済が使を送り調を奉った。別に上表文をたてまつって任那国の上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁の四県を欲しいと願った。哆唎の国守、穗積臣押山が奏上して「……」といった。大伴大連金村も意見に同調され奏上した。

物部大連麩鹿火を勅を伝える使とされた。彼がまさに難波館に出向き、百済の使に勅を伝えようという時、……

そこで改めて別人に勅された。賜物と一緒に主旨をつけ、上表文に基づく任那の四県を与えられた

(講談社学術文庫『日本書紀』上、352・353頁)

これは「任那四県の割讓」と言われている事

件であるが、今回のテーマである朝鮮半島南部に倭地があったからこそ、割讓することが出来た記事である。

これを考古学的な遺跡・遺物から見ると件那4県の割讓事件の「上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁」の四県は朝鮮半島の南西部にあって、十三墓の前方後円墳があり、横穴式石室も九州地方の石室に類似している。

これらの墓の被葬者は倭国の支配者層の人物であろうし、このことから朝鮮半島南部に倭地があったことを証明していると思う、と述べた。

### ○ ミトコンドリアDNA構成にみる日本人の起源

知多郡阿久比町 竹内 強

朝日新聞(2012年11月1日付け朝刊)は「DNAの分析結果から3000年前以降、韓半島から渡ってきた弥生人と縄文人の混血が活発に進んだ反面、南北に遠く離れている琉球

人とアイヌ族に縄文人の遺伝子的特徴が多く残った。」と報道した。

そこで、国立科学博物館の篠田謙一の『季刊考古学』第118号に掲載された論文「DNAによる日本人の形成」を紹介して科学的に見た日本人の起源論を説明した。

本土日本人のDNAと琉球人やアイヌではDNAが違っているが、同時に琉球人とアイヌもまた違っている。単純に本土にいた縄文人が弥生人の侵入によって南北に分断されたというのは間違いであることを説明した。

○ 『日本書紀』記事の異説(2)  
—古代史覚書帳徴—

瀬戸市 林 伸禧

『日本書紀』では、天智天皇の在位期間は10年であるが、異説に十一年説であることを説明した。

その違いは、次の表のとおりである。

天智 11年説	齊明	天智				天武
	7年 庚申	元年 辛酉	2年 壬戌	—	11年 辛未	元年 壬申
天智 10年説 (日本書紀)	齊明		天智			天武
	齊明六年 庚申	齊明七年 辛酉	元年 壬戌	—	十年 辛未	天武元年 壬申

十一年説の文献は『二中歴』、紀氏系図(『新稿群書類従』)、『懐風藻』、『歴代皇紀』、『革命勘文』、『万葉集』などがある。

また、天智天皇の御子の数に諸説がある。『日本書紀』では14人としているが、異説では12～19人である。

○ 再考・『隋書』國伝の竹島

名古屋市 石田敬一

『隋書』倭國伝に記述されている「竹島」について、次のとおり整理した。

- 1 倭國への行程の途中にある「竹島」は、その記述から朝鮮半島南西部辺りにある。
- 2 朝鮮半島南西部の全羅南道テヨルナムド全域に里・島・山・村の名称として「竹島」が19カ所現存

する。

- 3 この「竹島」は、『隋書』倭國伝に記述されている「阿蘇山」と同様に、今日まで字面が変わらず残った地名と考えられる。
- 4 好太王碑を始め『隋書』、『魏志』、『魏略』、『舊唐書』、『三国史記』、『唐會要』、『北史』など様々な史料と照らし合わせると、  
舩牟羅國=舩羅國=耽羅國=耽牟羅國=濟州島である。
- 5 濟州島である舩羅國が望める「竹島」は朝鮮半島南西部が妥当である。
- 6 以上のことから倭國への行程の途中にある「竹島」は、全羅南道テヨルナムド全域にある竹島である。

1 月 例 会 予 定

日時：1月20日(日) 午後1時30分～5時

場所：名古屋市市政資料館(第1集会室)

Tel:052-953-0051、名古屋市東区白壁1丁目3番地

参加料：500円(会員無料)

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分等

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料(30分170円)
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料(40分200円)

今 後 の 予 定

2月例会：2月10日(日)名古屋市市政資料館

3月例会：3月10日(日)名古屋市市政資料館  
例会は、2月・3月とも第2日曜日です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。